

13) 過去3年間に経験した胃平滑筋肉腫症例について

岡田 貴幸・高桑 一喜 (済生会三条病院) 外科
小田 幸夫
畠山 勝義 (新潟大学) 第一外科

昭和62年4月より現在までに、6例の胃平滑筋肉腫症例を経験した。これらの症例に対し、5例に局所切除術を、1例に胃全摘術を施行した。現在までのところ手術術式について、統一された結論はえられていない。山田らが内外の既報論文を集計したところ胃平滑筋肉腫のリンパ節転移頻度は、651例中77例、11.8%であった。したがって、胃平滑筋肉腫では全例に胃癌に準じた胃切除とリンパ節郭清を施行する必要はなく、症例によっては局所切除術で十分と考えられる。

14) 高齢者胃癌(80歳以上)の外科治療上の問題点

東山 考一・梨本 篤 (県立がんセンター) 外科
佐々木寿英・赤井 貞彦 (新潟病院) 外科
加藤 清・佐野 宗明
筒井 光広

昨年末までの23年間に、当科で経験した80歳以上の高齢者胃癌手術症例66例と、79歳以下の胃癌手術症例4066例を対象に、種々の臨床病理学的事項について比較し、さらに術後合併症とリスクファクターにつき検討を行い、高齢者胃癌の外科治療上の問題点を追求したところ、以下の結論を得た。① 80歳以上の胃癌症例に対しては縮小手術も含め、症例に応じた手術の合理化が必要である。② 80歳以上でも治癒切除が可能ならば、予後は十分に期待できる。③ 80歳以上の胃癌手術症例の術後合併症の発生に起因するリスクファクターとして、術前の白血球増加が一つの指標となると思われた。

15) 80歳以上の全麻開腹例の検討

磯部 茂・佐藤 滋美 (公立森町病院) 外科

人口の高齢化に伴ない80才以上の高齢者に対して手術を行なう機会が増加してきた。

演者が昨年4月、公立森町病院に赴任以来、本年9月末までの80才以上の全麻開腹例は18例である。うちわけは女性15名、男性3名と女性が圧倒的に多く、85才以上の超高齢者は女性4例、男性1例であった。悪性疾患10例、良性疾患8例で、うち2例は緊急手術例であった。術前合併症としては呼吸循環器系5例、肝腎障害4例、栄養障害3例などで、いずれも手術に耐えうるものと判

定した。

術中術後の合併症としては肺炎を主とする呼吸器合併症が5例と多く、1例は肺梗塞で失った。また精神障害(ボケ)は思いのほか少なく、1例で軽度の症例が認められたのみであった。

特に85才以上の超高齢者や緊急手術例では思いもかけぬ合併症がおこりうるため、術中術後の充分な管理が必要と思われた。

16) 僧帽弁位における Björk 弁と St. Jude 弁の臨床成績

春谷 重孝・中村 道郎 (立川総合病院) 心臓血管センター
阿部 寛政・菅原 正明
坂下 勲

当院での開心術症例は1989年7月まで1485例で、弁膜症手術例は391例で、今回 Björk 弁(B-S 弁)と St. Jude 弁(SJM 弁)による僧帽弁置換術の臨床成績について報告する。術前男女比、平均年齢、弁病変、病因には両弁に差はないが、術前 NYHA II° の症例が B-S 弁に多く認められた。手術死亡は B-S 弁4例(5.7%)、SJM 弁3例(3.7%)と差はなく、遠隔死亡も差を認めなかった。人工弁に係する死亡は B-S 弁のみ2例認められ、 $0.5 \pm 0.3\% / \text{pt-year}$ であった。Thromboembolism, Hemorrhage に関しては両弁間に有意差はなかった。SJM 弁の follow up 期間は短い、臨床的な面から SJM 弁は low-profil, bi-leaflet, central flow である点などより現時点では好ましい人工弁と判断した。

17) WPW 症候群の外科治療

菅原 正明・中村 道郎 (立川総合病院) 心臓血管センター
阿部 寛政・春谷 重孝
坂下 勲

1984~89年の5年間に経験した WPW 症候群の手術例17例を報告する。症例は13~66才で男性13例・女性4例であり、14例(82%)に心房細動発作の合併を認めた。副伝導路の有効不応期は220~270msec 以下であり、その存在部位は左房自由壁9例(52.9%)、右房前壁3例(17.6%)、左右の後心房中隔が各2例、左房後壁1例であり、3例は複数の副伝導路を有していた。手術は体外循環・心停止下に行ない、心房内から副伝導路を切離し、凍結凝固を併用した。手術成績では、初期の1例が DIC を併発し、1.5カ月後に失った他、1例で頻脈発作の再発を認めた。他の15例では全例経過良好であり、副伝導路の切離は88%の成功率であった。